

## 故小林昇名誉教授特集号によせて

『立教経済学研究』第65巻第2号に特集「小林昇経済学史をいかに受け継ぐのか」を組むにあたり、その趣旨について一言述べさせていただきます。

小林昇教授は、1982年に立教大学名誉教授の称号を授与された後、1992年には日本学士院会員に選ばれ、2010年6月3日に93歳で亡くなりました。立教大学における在職期間は1955年から1982年まで27年間の長きに及びました。小林教授は日本経済学史学会代表幹事を1972 - 74年に務められた他、『フリードリッヒ・リスト論稿』（1966年）などにより日本学士院賞を、『国富論体系の成立』（1973年）によりアダム・スミス賞を受賞されました。さらに、『小林昇経済学史著作集』全11巻（未来社、1976年～1989年）という、世界でも稀な個人による経済学史に関する著作集を出版されています。立教大学経済学部は、小林教授の学問的業績を称えて、2010年10月9日に経済学部葬及び偲ぶ会を執り行いました。また立教大学経済学研究会は『小林昇著作目録』を作成し、経済学史の分野に加えて、さまざまな評論、エッセイなど多岐にわたる小林教授の著作活動の全貌を明らかにしました。

近年、戦後日本の指導的な経済・政治思想家、研究者の研究プロセス自体が、研究対象となっています。小林教授の業績及び研究過程も、今日、すでに研究対象となっており、本号に寄稿された服部正治・竹本洋両氏の編集による『回想 小林昇』（日本経済評論社）の出版も予定されています。また経済学史学会関西西部会は、本年7月23日に「小林昇先生追悼シンポジウム：小林昇先生の遺産から何を学ぶか」を行いました。さらに本年11月に開催される経済学史学会全国大会でも小林先生の経済学史研究に関する報告が複数なされることになっています。

今回、『立教経済学研究』で特集を組むにあたり、私たちは小林教授の研究業績自体の内容及びそれが与えた学界への影響について、今日改めて検討を加えようと思いました。小林教授の研究対象は、イギリス重商主義、アダム・スミス、フリードリッヒ・リストという三本の柱それ自体と、それらの柱が織りなすデルタ地帯に伏在する問題です。それは、経済学形成の国民的・歴史的個性の検討を通じて、国民経済の構造的な特質を生産力という観点から解明するものでした。そして、この問題の分析がそれぞれの柱の分析に新たな視角と深みを与えるという循環が形成されています。別言すれば、歴史研究が理論・政策研究にいかに活かされるのか、の具体例を、私たちは小林教授の研究業績を通じて読み取ることができます。上記の問題設定自身は一面では大塚史学の流れの中に位置づけることができ、また小林教授自身が、自分の研究方法を「経済史研究における経済学史的接近」と述べられたこともあります。しかし小林教授は生涯にわたる研究を通じて「経済学史的接近」それ自身の固有の価値を一挙に高められ、

戦後日本の経済学史研究の独自の意義を確立された、といえます。

今回の特集は、こうした小林教授の経済学史研究の独自の意義を、研究テーマと方法の点で国際化が進む今日の時点で、小林教授の経済学史研究の影響を多く受けた本学部の教員及び学外の研究者が、それぞれの専門分野に即して検討しようとするものです。なお、今回ご寄稿いただいた肥前榮一教授は元本学経済学部専任講師を、また田村信一教授は元本学経済学部助手を務めておられました。

立教大学は、小林昇教授のすべての蔵書をデータ上は小林昇文庫として保存したうえで、小林教授の蔵書のうち社会科学関係の蔵書すべてとそれ以外の蔵書の一部をまとめた小林昇文庫を、2013年に開設することになりました。小林教授の蔵書の豊饒さは、すでに多くの研究者が指摘してきたところですが、小林昇文庫の創設により、学内外の研究者の利用が可能となるべく、私たちは現在準備を進めています。

今回の特集を通じて、小林教授の学問的業績に関する研究が今後さらに進展することを心より願っています。

2011年9月

経済学部長 池上 岳彦